

名古屋大学博物館第一五回企画展 特別講演記録

寸描―第八高等学校

山口拓史

日時 二〇〇八年一〇月二十九日（水）午後一時三〇分〜午後三時一〇分
場所 名古屋大学博物館講義室

（司会）今日は第九一回の博物館特別講演会ということで、「寸描―第八高等学校」というテーマで、大学書資料室の山口さんにお話しいただきます。もう皆さまご案内のとおり、来週土曜日まで、私たちの博物館と大学書資料室の共催という形で、「伊吹おろしの若者たち」という展示をしております。旧制の第八高等学校が本年度創立一〇〇周年を迎えました。先日、非常に盛大な記念式典と祝賀会がございましたが、それを記念してこういう展示をさせていただきました。その関連の講演会ということで、大学書資料室の山口先生にご講演いただきます。

はじめに

(山口) こんにちは。私は大学文書資料室で、名古屋大学の歴史を研究調査しております。皆さんには、既に下の展示会場でご覧いただいたかもしれないませんが、新制名古屋大学ができる際、それに包括された旧制高等教育機関が三つありました。そのうちの一つである第八高等学校を名大史ブックレットにまとめたということで、今回、この企画展で話をさせていただくことになりました。

ご覧いただくとわかるように、名大史ブックレットはそれほど分厚いものではありません。実はこのブックレットは、本学の全学教養科目の中で、主に一年生を対象に自分たちの大学の歴史を学んでもらう授業があり、そのテキストとして利用するために作成したものです。ブックレットということで、内容をコンパクトに収めましたので、あまり詳しいことは書いていません。

大体私に与えられている時間が一時間少しぐらいと伺っておりますので、ほぼこのブックレットの中身に沿って、必要なおところにポイントを置きながらお話しします。お手元に、前のスクリーン画像を画面に印刷したものが1枚と、同じく画面に五つほど資料を掲げた資料をお配りしています。適宜そういったものをご覧いただきながら、話を聞いていただければと思います。

講演のねらい 【画面①】

本日は、今回の企画展の趣旨を皆さんにより深く理解をしていただくために、企画展のメインテーマである「伊吹おろしの若者たち」を育んだ旧制八高の草創期をショートスケッチ（寸描）としてお話しさせていただきます。

なお本日は、先ほど西川館長からもお話しいただきましたが、先日一〇〇周年の記念式典を行いました旧制八高の同窓会「八高会」の方にお越しいただいております。私の話よりも、当事者である方々にお話を伺うとより意味があるのではないかと思っております、できれば今日の講演の終了後、質疑の時間を使わせていただいで、八高会の方々からもコメントをいただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

1. 旧制高等学校とは 【画面②】

大学一年生を対象にした授業がベースになっているため基本的な内容で恐縮ですが、最初に旧制の高等学校についてごく簡単に話させていただきます。ブックレットの四頁あたりを見ていただくと、簡単な学校制度図がみついています。

基本的に戦前の学校制度は、初等、中等、高等、それぞれの学校段階ごとに勅令を定めることによつて、各学校の中身が組み立てられるという制度になっていました。その関係もあつて、初等教育、中等教育、高等教育ごとに教育目的などが規定された制度として、非常に複雑な形を取っていました。これを理解するのは少し時間がかかっ

て難しいと思いますので、今日の話に関係するところだけをお示ししました。

今日の話で最初のターゲットとなるのは、一八八六（明治一九）年に出された中等教育学校向けの中学校令です。この中学校令については、ブックレット四頁の図1を見ていただくと、中学校は小学校から上がってくるものとなり、そして、中学校を経由して大学、つまり高等教育機関につながっていくことがわかります。文字どおり、小学校と大学の間の中間の中学校と理解されるのですが、これによって中学校は、下の小学校と上の学校をつなぐために最もいい形として発展していくと規定されるわけです。

具体的には、中学校を卒業して職業的な訓練ができるようになるために実業教育の準備を行うという目的がありました。その一方で、高等学校にも接続されるわけですから、高等教育への準備の教育もここでしなければいけない。そういう形で、中学校令で規定された中学校には、二重の目的が課せられたことになり、少し特殊なスタイルの学校になります。こうした流れの中で、現実に中学校令に規定された学校は、尋常中学校と呼ばれるものと、その後にくく高等中学校という二つの形態に分けられる形になりました。

今日の話は、この尋常中学校ではなく高等中学校についてのものです。画面には「当初七校」と書いてありますが、資料1「ナンバースクール（旧制高校）一覧」をご覧ください。少し表の見方についての説明が必要かもしれませんが、左の欄の不等号の記号で囲ったところに、例えば一行目に「第一高等中学校」、二行目に「第二高等中学校」と、高等中学校と書いた部分を数えていただくと、五つしかありません。一から五までと、その下に「山口高等中学校」が六番目になります。そして7番目が、「鹿児島高等中学造士館」という形で、明治期のこの段階では、この高等中学校は七校だけに限定されていました。高等中学校つまり高等教育準備、大学へ行くための準備をする学校という目的を中心に、こういった7校ができました。

そして時代が少し下りますが、尋常中学校と高等中学校のうち、大学へつながる方の学校が人気を博すようになりました。その結果、職業教育を目的とした学校よりも、むしろエリートを目指す高等教育機関、大学を目指したの学校としての人気が高まっていく中で、一八九四年に高等学校令が出されました。

これは、もともとあった第一から第五の高等中学校、先ほどの資料1にある高等中学校を「高等学校」に名称を変えた上で、ここでは専門教育を行うという規定を設けました。しかし、ここにも目的の二重性が残って、専門教育を行うことが主たる目的で、副次的に大学の予備教育も行うという、あいまいさを残した形になりました。そして実態としては、専門教育はやはりあまり人気伸びずに、最終的には高等学校は帝国大学に入るための予科を中心とする予備教育の機関だと、世間には受け止められるようになってしまいました。

その中で、第一から第五の五つだけが高等学校になったわけで、その高等学校に通えば帝国大学につながるというところで、人気が高まる中で、徐々に世間の人気に應えるような形で、最終的に一九〇八年、明治四一年までに八つの高等学校が作られました。これが俗に言われる、第一高等学校から第八高等学校までの、いわゆる「ナンバースクール」と呼ばれるものです。日本の教育史の中で、いわゆるナンバースクールと呼ばれるものは八番で止まり、それ以降、旧制の高等学校が残る三〇校ほどありますが、それについては設置された地名をつける、いわゆる「ネームスクール」となりました。そういった形で、ナンバースクールとネームスクールの間には少し区別があるという受け止め方が、世間でもされることになりました。

この高等学校令は、大正期になって一九一八年に改正されます。このときの改正によって、高等学校では男子のみが高等普通教育を行うことが明示され、修学年限も七年間を原則とするようになります。この七年間は、尋常科四年と高等科三年に区分されます。そして、高等学校は原則として七年制ですが、ご存知のように高等中学校もし

くは高等学校は就学年限三年間ですから、後ろの高等科三年だけでも設置してもよいということで、高等科のみの高等学校が事実上、ナンバースクールとして作られていく形になりました。こういった仕組みの中で、戦前の中等教育、高等教育、特に旧制の高等学校の制度が整備されていきました。このスタイルは、おおむね昭和期に入つて、いわゆる戦後になるまで、これを原型とした形で続いていくという実態がありました。

今日話をさせていただく第八高等学校は、今登場しましたように、最後のナンバースクールとして一九〇八年に設立をされたものです。今年、八高そのものが創立されてから一〇〇年を迎えますから、八高そのものの歴史は、戦後になって学制改革で廃止をされるまで、四二年間存在した学校です。本日は、その四二年の歴史の中から、ほんの一部分を抜き取つてお話をさせていただきたいと思ひます。では、八高そのものの話に移りたいと思ひます。

2. 八高創設の経緯【画面③④】

最初に、八高創設の経緯について話します。八高が愛知県に創設されるようになった経緯を紹介する前に、資料2をご覧ください。これは、秦郁彦さんが二〇〇三年に出された『旧制高校物語』という新書の中で、八高がどのように紹介されているかという部分を抜き書きしたものです。

六高から八年おかれて明治四十一年、最後のナンバースクールとして、「伊吹おろし」の吹きおろす名古屋市外、南側の瑞穂ヶ丘（瑞穂）に開校。東海地区が高校不在と気づいた愛知県と名古屋市の猛烈な誘致運動によると伝わっている。

初代の大島義脩校長は、名古屋の風土にも合い、しかも「先進高校の旧弊を一新し、新鋭の模範高校となる」ことをめざした。①生活面にわたる指導教官制度、②軍事訓練の導入、③成績の席次廃止、④選手制度や応援団の禁止、などである。さすがに禁酒・禁煙の強制はあまり守られなかったようだが、上からの規制と管理がきびしく、中学校と変わらないとの悪口も聞かれた。

ともあれ八高の穩健・中正・堅実といわれる校風は、こうした初期の方針によって形成されたといえよう。しかし時代の波は変化をもたらさずにはすまない。大正中期頃から選手制度や応援団も設けられ、寮のストームの頻度と猛烈さは有名になった。昭和期に入ると左翼運動も盛んだった。

八高は名古屋という関東と関西の中間点に位置し、生徒の出身地も愛知県が五割以上を占めるにもかかわらず、開校から昭和十七年までの進学先を見ると、東大が四〇三四人、京大が一六五六人に対し、地元の名古屋帝大はわずか二六八人で、中央志向がきわだっている。

昭和二十四年、八高は名古屋大学に吸収され、翌年に廃止された。

このように、各校の紹介をする中で、八高については今読み上げたような説明がされています。おおむね、この説明に間違いはないと思います。基本的には世間にもこういう形で八高が理解されていると考えていただいて構わないと思います。

その八高が創設される経緯で、「猛烈な誘致運動」の結果創設されたとありましたが、その経緯には、実は幾つかのステップがあり、まず最初にこれを「背景」という形で表現しました。残念ながら資料が不足しているため詳細は明らかでないのですが、最初のもの実現には至らなかったということです。

一八九一年、明治三二年の時点で、一〇年ぶりの官立高等学校増設の議論が帝国議會で出されるようになりました。これは、つまり一〇年間は新しい官立高校ができなかったということです。ですから、それぞれ高等学校に関心を持っていた都道府県としては、一〇年ぶりの新しい高校ができるということで、誘致合戦を行いました。そのときに愛知県も誘致合戦に加わっていたことが確認されていますが、最終的にこのときは二年後、一九〇〇年に、岡山県にそれを設置することに決まりました。それが現実の第六高等学校（六高）です。

それで、愛知県はその時どのような活動をしたのかを、愛知県議会史などで調べてみましたが、記述として若干の動きがあったことは確認が取れるのですが、具体的にどのような意見書を取りまとめ、予算案等をまとめたのかについては、該当する資料を見つけないことができず、現在のところ、誘致の活動の詳細は分からないと本日は申し上げておきます。

それから少し時間がたって、連続的に一年ほど後に愛知県による初めての誘致活動がなされます。つまり、第六高等学校ができてた後に、その翌年度にまた七高ができるという情報が流れてきたのでした。六高は逃したけれども、次の七高は手に入れたという県がいろいろあり、愛知県もその中の一つとして、早速に明治三三年度つまり一九〇〇年度に間に合うように、情報を入手した時点で愛知県は直ちに臨時県会を開いて、そこで七高誘致のための追加予算を可決しています。

この追加予算については、議案として「第七高等学校設置に関する寄付金の件」という形をとり、内容としては設置に関連する費用を愛知県が出すことを条件に、第七高等学校を愛知県に設置してくださいという枠組みのものでした。それが一八九九年と一九〇一年で、一九〇一年の場合は通常県会でやはり意見書を可決している形で、波状攻撃をかけながら、「何とか七高を」という運動を展開したのです。しかし、このときも、その年の暮れには、

最終的に七高は鹿児島県に設置するという結論になってしまいました。

その後しばらくして、二回目の誘致活動が一九〇五年に行われました。当時、官立名古屋工業高等学校という、今の名古屋工業大学の前身校の誘致活動が成功して、愛知県にこれが設置されることが決まりました。ただし、この名古屋高等学校の誘致活動には三、四年の時間を費やしています。つまり愛知県は、高等学校の設置に失敗した直後に、今度は高等学校の誘致活動を行っていたのです。この名古屋高等学校の誘致成功が、八高の誘致活動の再燃のきっかけになります。

このときにライバルとなったのは静岡県と長野県ですが、今回の誘致運動は最終的には八高の創設に結びつきました。その途上では、愛知県はやはり通常県会で、「建設用地と建設設備費用、すべてを自分たちが負担しますから、旧制高校を」という形で、陳情活動を行ったのです。その建設用地については、愛知県がかねてより第五中学校用に予定をしていた土地を振り替えて、旧制高校のために使ってくださいという提供の仕方でした。さらに、校舎等の建設費用となる二八万六〇〇〇円について、これを三カ年に分けて支払うという形での寄付案を県議会は承認し、可決しました。

この「土地も提供します、建設費用も提供します」という流れの中で、ようやく文部省は八つ目の高等学校を愛知県に設置する方針を固め、実地検分等のプロセスを経て、最終的に一九〇八年三月三十一日の官制改正「文部省直轄諸学校官制中改正」によって、四月一日から第八高等学校創設すること、場所は愛知県とすることを決定しました。

したがって、愛知県の誘致活動は最初のところから考えると一〇年の年月をかけて、その途中で別の高等工業学校ができるなど、その意味では粘り強い誘致運動の末に設立された旧制高校であると理解していただいて構わない

と思います。

3. 初代校長大島の八高運営【画面⑤～⑦】

(1) 初代校長大島義脩（おおしま・よしなが）

次に、粘り強い誘致運動によって創設された八高について述べたいと思います。八高の初代校長は大島義脩という人物ですが、彼の学校運営は他の旧制高校とは異なるところがあり、それによって八高としての特色、輝きが出てきています。

初代校長の大島義脩は、一八七一年、丹波国氷上郡丹波市に生まれました。長崎など、父親の仕事の関係で国内をいろいろと転居することが多かったようですが、学歴としては、第三高等中学校（三高）を経て帝国大学に入学しました。当時、帝国大学というのは今でいう東京大学です。帝国大学の文科大学、それから大学院を卒業しています。そして二四歳のとき、一八九四年に一年志願兵として入営して、近衛兵の歩兵に配属されます。その後、一年志願とはいえ、その後も最終的には三六歳まで陸軍省の兵籍を保持し、最終的には、三六歳の時点で陸軍歩兵中尉となっています。

こうした経歴をもつ大島ですが、八高には一九〇八年の創立の年に、最初は事務取り扱いと兼務の形で八高の校長に就任しました。年齢にして三八歳で、当時としてもかなり若い年齢でした。さらに、この大島にとっては、八高が初めての校長職ではなく、それ以前の三二歳のとき、東京音楽学校校長を兼ねており、学校運営の経験は既に持っていました。さて、大島は第八高等学校には一〇年間在任しています。後の伝記にも書かれていますが、八高には

特別の思い入れがあったようで、当時の同僚からも八高の基盤づくりに献身したという評価を得ていたことが書物などからわかります。

資料3として八高の略年表、資料4として八高の歴代校長一覧を示しておきました。また、資料5は大島先生記念会が刊行した『大島義脩先生伝』という伝記から取ったものです。一九一九年に大島校長の胸像を八高内に設置した際、その式典に大島校長自らが語ったあいさつ部分を抜き書きしたものです。

……本校の創立は此頃流行の学校増設とは全然意味を異にして居たのを忘れてはなりません。この頃のは志願者が入り切らないから学校を増やすのですが、本校の出来た時は既に七つの高等学校がある所ですから、一つ位増したとて収容人員を増す上には殆ど何の役にも立たない訳です。これは他の七つの高等学校が出来てから十年以上になり、段々だられて来たから、新しい高等学校を造つて引締つた所を示し、他の学校を覚醒せしめようといふ目的だったのです。即ちこの頃の学校増設は量の拡張であり、本校の創設は質の向上であつたのです。而して本校はこの重大な責任を立派に果して来たので、このことは先づ文部省が認め、次いで各帝国大や、高等学校も認めるやうになつて来ました。これまで本校は十年以上の先輩たる七つの高等学校を押し上げて来たのですが、これからは十年後の今日新に出来る後輩を引張り上げて行かねばならぬ責任を持つて居るものと私は信じます。

大島はこのように述べており、「あいさつ」であることを差し引いたとしても、八高に対する思い入れ、それから自らの学校運営に対する自信を伺い知ることができるのではないかと思つております。

(2) 大島による新機軸

大島初代校長の八高の運営について、先ほど紹介した大島伝の書物等に書いてあることを整理してみますと、大島独自の取り組みが少なからずあります。以下では、その中から新機軸、いわゆる新しい試みとして代表的なものを幾つか、順に簡単に取り上げていきたいと思います。

第一に、大島は教員の訓練にかなり力を入れていたようです。つまり、教育は教師によつて左右されるといった考え方が基になり、至るところで機会あるごとに教員を集めて、あるいは教員に接して、教師たるもの、こうあるべきだというようなアドバイスをしたようです。具体的には、食堂座談ということで、食事をしてるときも、機会があればそういった訓話をされたということです。また、教官室のストープ会議ということで、教官室で皆さんストープで暖まっているところでもやはり校長が話をしたり、常に教師を指導するという立場からの話があつたということです。そういった大島のスタイルについて、「諸君は学者であり、教育家であり、官吏であらねばならぬ」という大島の言葉を紹介し、当時の教師が大島から学んだことはこの一言に尽きると記しています。

第二に、指導教官制です。これは今の時代にも通用するもので、学生に対して担任をする指導教官を作り、すべての学生はどこかの教員、誰かの指導教官の下で教育を受けるという体制を作つたということです。これは八高創設時に、大島の創意工夫によつて導入されたということです。当時こういった制度はなくて、後によくほかの高校にも普及するようになりました。つまり、指導教官制を始めたのは大島であると書かれています。

第三に、後ほどのテーマにもなりますが、軍事教練と現役将校による検閲があります。八高では軍事教練が早くから行われていました。全国の高等学校の中では、八高が最初に軍事教練を行っていました。大島の略歴からわかるように、軍籍を持つていた期間もかなりあつたわけですから、そういった経験を生かしながら、学問の向上、教

練を二本立てにして教育をしていくという、大島の独自のやり方がここからもみえてくると思います。

第四に、五点飛採点法と成績群団制というのがあります。これは、一点ごとの点数差で生徒を並べるのではなくて、五点単位で点数を与えて、その五点の枠にあれば、ほぼ大同小異同じものであるとする考え方です。わずかな点数差によって生徒たちの品等づけをするのをやめて、おおよそ同じ、粒のそろった生徒たちを束ねてグループを作り、そこで教育活動をしていくという工夫をした指導法で、これも大島の発案によるものとなっています。

第五に、少し教育とは異なる事務体制の話ですが、大島は課長制度を創設しました。生徒課、教務課、庶務課、図書課という四つの課に、従来はなかった課長を配置して、これによって学校事務の迅速化を図りました。これも大島のアイデアによるものということで、後に多くの直轄学校、つまり国立学校に採用されています。

第六に、大島の守備範囲はかなり広く、一九一一年に最初の卒業生が出たときに八高の同窓会を設立しています。これは、高等学校では初めての同窓会でした。当時、ナンバースクールを中心とする旧制高校に入る者たちは、すぐ先に帝国大学が待っているわけですので、高等学校はある意味、通過地点という位置づけになっていました。その結果、大学の同窓会活動が活発であつても、中間地点である高等学校では活動がほとんどされていなかったのです。大島は、そうした現実に対して、そうであつてはならぬということで同窓会の設立を行ったということです。

この同窓会の活動は、年に一回会員名簿（後に会報）を必ず発行すること、さらに年に一回母校に生徒たちが集まって式典や総会を開催していくことをずっと続けていたようで、まさに今日の同窓会のスタイルでした。名古屋大学の場合も年に一回、ほかの大学でもそうですが、年に一回、同窓会総会を母校にて開催することが、このときに発案されていたということになります。

さて第七として、再び教育活動の面に話を戻します。大島は運動を奨励しましたが、選手制度というものは嫌い

ました。選手制度とは、野球部であれば野球だけの特定の運動にかかわって、対校試合などで選手として活動するという制度を意味しますが、そうであつてはならないというのが大島の考え方でした。つまり、大島は、人間は心身ともにバランスよく成長することが必要であると考え、さらに運動については一つの運動に限ることなく、二つ以上の運動の練習を心がけるよう生徒に指示をしていたのです。しかも運動する際には、とにかく実力を高めていけばいいのであつて、どことやつて勝つた負けたという勝敗主義には陥らないということ、常に気にしていたようです。そういった形の一番分かりやすいものが選手制度の否定ということで、これは大島の新機軸と考えられます。

その他いろいろある中で、特待生制度あるいは入試の免除などで、学業奨励の施策も大島なりにいろいろなものを用意していました。また、学寮の話が後ほど出ますが、すべての生徒を寮に収容できない状況にあつて、大島は、主に第二学年以上のもをを対象として、自宅通学が困難な者について公認の下宿を指定して利用させる措置をとりました。

また、夏の水泳訓練というものもあります。これは、知多半島の野間海岸で水泳をすることを大島が始めたということです。「野間海岸を開発したのは、八高の大島校長である」ということがある文書に書いてありますが、それについては少し議論があるところかもしれませんが、夏に八高生は野間海岸に向いて水泳の訓練を受けたことは事実です。

以上、紹介したような独特の教育的な施策を大島はどんどん打ち出して、八高最初の一〇年の間に八高にしかない教育方法をたくさん生み出しました。それが後に、ほかの旧制高校等に引き継がれていくという点で、先ほど紹介した資料に既存の七つの学校が、「だんだんだらけてきて」云々とありましたがその真偽はともかく、やはり八

高の教育運営の仕方、大島による学校運営の仕方は、従来の高等学校の枠を超えた新しいものを求めて日々学校運営を行っていたのだということを私たちは知ることができると思います。

4. 八高の校風【画面⑧】

さて、初代校長の大島がいろいろな新しい施策を行う中で、八高そのものはどういった校訓を持つようになったのでしょうか。先に紹介した資料2では、「穏健・中正・堅実といわれる校風」となっていますが、そういったものを排除するつもりはないのですが、私はブックレットの中で三つのことを挙げました。第一が「勤勉八高」、第二に「教練八高」、そして第三が「スポーツ八高」です。今回の企画展でも、この三つのテーマでパネルが展示されていますが、その内容について簡単に触れておきます。

(1) 勤勉八高

まず一番目の「勤勉八高」は、ブックレット二〇頁に書いておきました。例えば八高生の高い出席率を例として挙げています。創設当初が九五%、大正期以降も九四%という高い出席率です。当時の年間授業時数をみますと、今の高校と大体同じで年間一〇〇〇時間をちよつと切るぐらいで、九七〇時間とか九八〇時間ぐらいです。その授業の中で、八高生の平均の出席率は九五%前後であり、これは非常に高いものであると『名古屋大学五十年史』（通史）の中にもそういった記述がありました。確かに高等学校という名称から新制高校と混乱しそうですが、旧制高校は大学に相当する高等教育機関であり、その出席率が九〇〜九五%であることは注目する必要があるのではない

かと思えます。「出席率がよい＝勤勉である」と単純化できないかもしれませんが、高い出席率を誇ったというかと自体が一つの、やはり八高の校風として記録されてもいいのではないかと思います。

さて、ブックレット二〇頁の表3で、単なる出席率だけではなく学年の成績概況を示しておきました。一九一一年と一九二二年のものを比較したのですが、九五%の出席率を誇る八高であっても、毎年やはり落第した者は存在したのです。落第率を計算してみました。学校の制度が途中で変わり、一九一一年の段階では一部、二部、三部という三部構成で制度が運用されていましたが、一九二二年の段階では文科と理科、今という文系と理系に分けた上で学年が分けられておりますので、少し比較の仕方が違うかもしれませんが、一応計算をしてみました。その結果、一九一一年では平均して一一%の落第率、また一九二二年では約六%の落第率となつて少し下がっています。出席率が高く、授業に出席したとしても、試験等で振り落とされて、休学ではなく落第する生徒が五〜一〇%存在したという事実があつたのです。こうした点について『名古屋大学五十年史』（通史）などでは、八高では厳しい授業がなされていて、単に出席をしていれば点数が取れるだけのものではなく、このような厳しい就学状況があるのではないかと書かれています。以上が「勤勉八高」についてです。

(2) 教練八高

次に、「教練八高」についてです。ブックレットは二一〜二二頁に記述があります。これについては、先ほど申し上げましたように、大島校長の創意による軍事教育を指摘できます。

長く軍籍にあつたキャリアにおいて、大島は軍事教練が持つ教育効果に確信を持っていたものと思われれます。教練を高等学校という場に持ち込み、厳格な生徒教育を行ったわけです。のちに大島校長を短評した文書の中に、彼

は「学問尊重と並行して教練には頗る熱心であつた」と書かれています。やはり心身ともにバランスのとれた教育のあり方というのが、常に大島の頭の中にあつたのだと思います。

(3) スポーツ八高

「スポーツ八高」については、ブックレット二二〜二四頁で簡単にまとめています。この「スポーツ八高」は、すでに述べた(1)(2)とは少し異なる部分があります。大島自身がスポーツ制度を否定して「選手養成をせず」という原則を掲げていたことはすでに述べましたが、この原則は大島が去つた後も第二代の岡野義三郎校長時代も守られています。その後、八高に選手制度が導入されたのは一九二二年のことでした。第三代の芝田徹心校長の時代です。

選手制度が認められていなかった時代には、例えば他の学校と対校試合を行うにも選手がいなかったため、「八高には選手がいらないから試合はできない」と辞退したことがあります。あるいは特定の運動部の選手がいなかったため、試合の都度有志を募ることでにわかにチームを作つて対校試合を行ったということがあつたようです。八高生の立場からみると、やはり一つのスポーツに専念して選手としての訓練を受け、他の旧制高校を相手に試合をしたいという願いがあつたようで、選手制度を認めてほしいという要望が生徒側からあつたようです。ただ、それは大島校長の受け入れるところではなく、二代目の校長もそれを認めませんでした。しかし、三代目の芝田校長の際によく選手制度が認められたのでした。

そのあたりのことについて、ある本には、生徒側としては、「どうせだめだろう。芝田校長も選手制度を採用しないだろう」と思いながらも、恐る恐る芝田校長に選手制度を求めたところ、「分かつた」とほぼ即答的に選手制

度が認められることになり、拍子抜けであったというようなことが書かれています。こうした対応の背景には、芝田校長が時代の変化をみて、事前に歴代校長から内々に了解を得ていたのではないかも知われます。

この選手制度の導入によって、それまで禁じられていた運動部が生まれることになります。ほんの一例ですが八高では、野球部、陸上競技部、水泳部、漕艇部、柔道部、卓球部、蹴球部、弓道、剣道、その他多くの運動部が作られて活躍するという時代を迎えました。こういった八高の選手団の活躍によって、徐々に「スポーツ八高」という三つ目の校風が作られていったことになります。

ただし、運動部の解禁Ⅱ「スポーツ八高」という校風がにわかに形成されたのではなく、選手制度採用せずと言いつつも、常に複数のスポーツに関わり、いつも体を鍛えておくことを求めた初代校長の教育方針がベースとなっていたのではないかと個人的には思っています。心身のバランスがとれた教育をベースとして、運動部が創部されたことで選手たちの活躍力が増幅されたのではないのでしょうか。

以上、八高の校風である「勤勉八高」「教練八高」「スポーツ八高」について述べました。

5. 生活拠点としての学寮【画面⑨⑩】

(1) 代用学寮

旧制高校といえ、やはり寮生活というものが欠かせないテーマとなります。次に、生活拠点としての「学寮」について、残りの時間を使わせていただきたいと思えます。

八高の場合、創設された一九〇八年には、正式な校舎はまだ完成しておらず、仮校舎でスタートします。校舎が

仮校舎であると、当然ながら、そこに設けられている寮も正式なものではなくて、代用、代わりのものとしての寮が用意されました。「代用学寮」と呼ばれています。名古屋市東区の小川町周辺には、今でもたくさんさんの寺院が残っていますが、そこにある七つの寺院と公認下宿一軒を代用学寮と位置づけ、そこに生徒を分散させて寮として機能させたことになっています。八高では寮を「学寮」と呼びますが、その本部は妙本寺という寺院に置かれ、そこには事務所と炊事場が置かれた。本部としての妙本寺には教員が宿直をしていたことが記録に残っています。

代用とはいえ寮生活が始まると、そこに生活する生徒たちは寮のルールを制定するようになります。ブックレットの二四〜二五頁で簡単に触れていますが、八高では一九〇八年に「寮紀」が制定されました。その内容は次の通りです。

「吾人寮生ハ校風発揚ノ中心タランコトヲ期シ言行苟クモセス至誠ヲ以テ天地ニ愧チサルヘシ」

「吾人ハ恥ヲ知レノ一語を掲ゲテ標榜トシ卑屈懦弱ヲ斥ケ放肆暴慢ヲ戒メ廉恥ヲ重ンシ操守ヲ固クシ品性ノ向上ヲ企図ス」

「吾人ハ此精神ヲ以テ自彊息マス共同一致シテ寮紀の振作ヲ努ムヘシ」

ここには、八高学寮生として社会に恥じることがないように、「恥を知れ」という言葉をモットーにして、剛健かつ誠実で節操を守ることによって品性を高めていこうとすることが大切であり、すべての学寮生がこのことに日々努力するべきであることが謳われています。この寮紀は、その後もずっと引き継がれていくものになります。

(2) 新学寮

さて、寮紀制定の翌年一九〇九年には新しい校舎が完成します。それに伴って新しい学寮も設置されました。

八高の学則は、その五二条で全寮制を謳っています。「新二入学シタル生徒ハ特別ノ事情ニ依リ通学ノ許可ヲ受ケタルモノ、外総テ学寮ニ入ルベキモノトス」という一文がそれです。特別の事情がある場合は通学でもよいという内容ですが、この条文によって、原則として一年生は学寮に入ることになります。学寮の収容人数の関係もあって、全学年の生徒に対する入寮制ではなく、一年生については原則入寮ですが、上級生は収容枠があれば入寮できるといふ形になっていました。現実には、上級生と一年生の組み合わせで一部屋を構成し、六人で一つの部屋を利用する形式の学寮生活が保障されていたこととなります。

さて、新しい学寮では大正期に入って「学寮規約」が新しく決められます。もとの学寮規約は新学寮完成時に作られたものですが、一九二〇年になって、大正期の「におい」が反映された新学寮規約が制定されました。画面上に赤文字で書いたところが具体的に追加された部分です。寮生は「寮紀寮則ヲ守リ自治ノ精神ニ基キテ善美ナル校風ヲ発揚センコトヲ期ス」となります。従来、自治の精神というものは、この学寮規約の中には含まれていませんでしたが、一九二〇年の学寮規約改正において、「自治ノ精神ニ基キテ」という文言が追加されました。旧制高校といえは寮の自治という言葉が連想されますが、そうした寮運営面での自治精神を重んじる「学寮自治」が規約上に示されたのでした。

新しい学寮は、新校舎と同じところに設置されましたので、今の名古屋市立大学の場所です。名古屋市瑞穂区瑞穂町山の畑、つまり八高のあった場所に設置されました。初代校長の大島は、学寮での生徒の勉学が生徒の成長に大きく影響するという考えを持っており、学寮の設置形態については独自の考えを持っていましたようです。しかし大

島が赴任したときには、既に学校校地が決まっています、寮の建設も進んでいましたから、大島のイメージどおりに
はならなかったというのですが、学校の敷地の中にしっかりと学寮を位置づけた学校運営を行いたかったという
内容のことを大島は述べています。

現実にはできなかったのは、校地に隣接するような形で学寮は設置されたということで、少し、大島の学寮と校舎
とのイメージとは異なったようですが、後に大島は寮の置かれ方は違っていたけれども、運営そのものによって、
自分の目指していた寮生活の成果は八高生に十分みられるので満足であるとも言っていました。

(3) 学寮生活の「アクセント」

さて、ブックレットでも少し触れましたが、生活拠点としての学寮生活については日課表なども残されています。
その日課表によると、かなり規則正しい生活をしていることになっています。しかし日課表どおりの生活だけでなく、
く、当時の八高生はコンパや寮会をよく行っていました。この寮会については、代用学寮時代からあった茶話会が
起源になっているといわれています。そしてコンパには、全学で行う「全寮コンパ」がありました。これは寮風喚
起を目的としたもので、「少し寮がたるんでいる」といった場合に行われたようです。また、卒業に際しての三年
生歓送といった目的を持って行われる全寮コンパもありました。あとは機会に応じて不定期的に行われているコン
パ、今日の大学生がやっているのもこういう形ですが、そういったコンパも行われていました。

一方、寮会についてはコンパよりも少し組織立ったもので、通常は年三回開催されたようです。ある資料には、
寮会の場合には校長や教官も臨席をしたと書いてあり、校歌を歌ったり、寮紀を朗読したり、あるいは寮生の演説
を聞いたりという、いろいろな行事があったようです。そういった一連の行事が終わったあとに、楽器演奏や演劇

など余興が行われます。むしろ、こちらがメインだったのかもしれませんが、一連の行事や余興のあとに、みんなで寮歌を合唱することで幕が閉じられるというスタイルで行われました。

次に、ストームについて述べます。これは文字どおりストーム（嵐）で、代用学寮時代から、小規模なストームはあつたことですが、時代と共に行動は大規模化、過激化したといわれています。辞書などによると、基本的にストームは突発的に行われるものであるとされ、「一般に、夜間に集団で寮歌などを大声で歌いながら寮外を乱舞したりする。他人の部屋に侵入して、手当たり次第荒らしてまわる」ものであるという説明がされていました。

ストームの実例については、ある記録によると、一九二七（昭和二）年三月に大きなストームがあつたようです。このストームでは、窓ガラスが四〇枚、入り口の扉が二七本、壁一カ所、消火器二本が壊れてしまい、さらに、水入れ、ジョウロ、洗面器、ちりとり、ほうきといった小さな器物は、数も数え切れないぐらい被害を被つたという記録があります。冒頭の紹介した資料2にもあつたように、八高のストームは時代とともに過激化・大規模化したようです。そして大規模化の一例として、展示会場のパネルにもありますが、名古屋市繁華街の中心地である栄交差点で路面電車を止めたストームがあります。そういつたことができる社会、八高生がそんなことを行つても許してしまう「ゆとり」という表現が正しいのかわかりませんが、そういつた社会があつたがゆえにストームが発展したのであるかと思えます。学生寮、寮生活、ストーム、これらもまた一連として連想される言葉です。

最後に、寮歌合唱に触れます。一般に、旧制高校生は事あるごとに寮歌を合唱しました。各校ごとに自分たちの寮歌をたくさん作っています。八高の場合もおそらく一〇〇曲を超える寮歌が作られています。その中で、今日の名古屋大学に引き継がれている寮歌の一つに「伊吹おろし」があります。展示会場でも「伊吹おろし」の音楽が流れていたかと思えますが、これは一九一七（大正六）年に制定されたもので、当時三つ制定されたうちの一つだそ

うです。八高学寮で最初の寮歌は「殺伐の風」というものですが、残念ながら私は聞いたことがありませんが、歌詞は残っています。しかし、「伊吹おろし」制定後は、それが八高を代表する寮歌として全国的に知られています。そういった素晴らしい歌ということで、例えば今は本学の体育会や運動部などでも、応援歌・学生歌という形で「伊吹おろし」が歌われていると聞いています。残念ことに、現在の名大生の多くは八高の存在を知りませんが、「伊吹おろし」は知っている、歌ったことがあるという学生は一定数存在し、寮歌は健在という側面もあります。

まとめにかえて【画面⑪】

最後に、「まとめにかえて」ということで、少しお話をさせていただきます。

以上、おおまかな話で恐縮ですが、「伊吹おろしの若者たち」を育んだ旧制八高の、まさにショートスケッチを試みてみました。冒頭に西川館長からお話がありましたように、ちょうど一日ほど前に、八高会では創立一〇〇年記念祭を開催しています。当日の会場には七〇〇名ぐらいの参加者があったということで、今なお八高は存在感をみせています。これは八高だけに限らず、旧制高校全体に共通することだと思いますが、今日においても旧制高校は強烈な存在感を維持しているのは事実だと思います。

先に資料2で紹介した秦氏は、旧制高校が今日なお強烈な存在感を示している原因を彼なりに分析をしております。同氏の分析によると、第一にエリート養成機関であったことです。全国の中のほんの数パーセントの者しか旧制高校に入れないという中で、すぐれた教師陣による少人数の教育環境があったということです。

第二に、ゆとりある一般教養のカリキュラム、英語・外国語を中心としたカリキュラム、語学に力点が置かれた

カリキュラムが用意されていたことです。八高の場合は数学もそうですが、質の高い教養カリキュラムがそこで提供されていました。そして第三に、何よりも学寮生活を通じて生徒間に強い絆意識が形成されていたということです。

こういった三つの要因が絡みあうことによつて、時代を越えて、いつもエネルギー活動ができていたのではないかと思います。

ただし、その一方で、例えば八高を例にとつてもよいと思うのですが、今日においてそれら三つの要因が整えば、八高のような存在の高等学校ができるだろうかというふうに視点を変えてみますと、それはかなり難しいと思います。エリート養成機関という点でそういう側面があるかもしれませんが、少人数制を採り入れて、すぐれたカリキュラムを用意し、例えば寮生活のようなスタイルで生徒を教育する環境を整えたならば、まさに旧制高校が文化を生み出したように、今の新しい高校や大学が新たな文化を生み出せるのかというと、どうもそれは難しいのではないかと個人的には思います。

その理由を問われると、今の時点では十分な説明をすることは残念ながら私にはできません。しかし今回、八高のブックレットをまとめたり、今日の講演準備を行つたりする中で、時代を越えて同じ環境が整えられたとしても旧制高校の復活はおそらく不可能であると直感的に思いました。やはり旧制高校は、明治期という日本の歴史上一つの意味のある時代、しかも高等教育については、まさに手探り状態で高等教育を作つていた時代、近代学校制度が作られつつあった時代の中で、生み出された教育機関ではないでしょうか。それは、おそらく再現性のない条件が重なつてできたものだと思います。この文化を新たに作ることができないのであれば、できれば次の世代にも、やはり語り継がなければならぬ。もし、取り入れることができる部分があるのであれば、それはどんどん取り入

れていく。そのようなことが、これからの大学の教養教育にあってもいいのではないかと考えています。

本日の話では、八高四二年の中で、ほんの一部分しか触れることはできませんでした。特に戦時下の八高、それから戦後の八高という点では復興浮運動という大きなイベントがありますが、そういつたことについては、残念ながら触れることはできませんでした。ただし幸いなことに、本日の会場には大先輩であります八高OBの方々もお越しですので、このあとの質疑の際に、ぜひコメントをいただきたいと思えます。

予定の1時間を少し越えてしまいましたが、「寸拙く第八高等学校」というテーマで講演をさせていただきます。ご清聴ありがとうございます。

〔本稿は、講演会当日の録音内容をテキスト化し、不正確な表現や文脈の乱れなどを加筆修正したものである。〕

【資料1】 ナンバースクール（旧制高校）一覧

名称 <旧称>	所在地	創立決定年月	備考
第一高等学校 <第一高等中学校>	東京	1886(M19)年4月	1894(M27)年6月に改称 東京大学の前身校
第二高等学校 <第二高等中学校>	仙台	1886(M19)年4月	1894(M27)年6月に改称 東北大学の前身校
第三高等学校 <第三高等中学校>	京都	1886(M19)年4月	1894(M27)年6月に改称 京都大学の前身校
第四高等学校 <第四高等中学校>	金沢	1886(M19)年4月	1894(M27)年6月に改称 金沢大学の前身校
第五高等学校 <第五高等中学校>	熊本	1886(M19)年4月	1894(M27)年6月に改称 熊本大学の前身校
山口高等学校 <山口高等中学校>	山口	1886(M19)年11月	1894(M27)年9月に改称 山口大学の前身校
第六高等学校	岡山	1900(M33)年3月	岡山大学の前身校
第七高等学校造士館 <鹿児島高等中学造士館>	鹿児島	1887(M20)年12月	1901(M34)年3月に改称 鹿児島大学の前身校
第八高等学校	名古屋	1908(M41)年3月	名古屋大学の前身校

【資料2】

第八高等学校（名古屋）

伊吹おろしの雪消えて

六高から八年おくれて明治四十一年、最後のナンバースクールとして、「伊吹おろし」の吹きおろす名古屋市外、南側の瑞穂ヶ丘（瑞穂）に開校。東海地区が高校不在と気づいた愛知県と名古屋市の猛烈な誘致運動によると伝わっている。

初代の大島義脩校長は、名古屋の風土にも合い、しかも「先進高校の旧弊を一新し、新鋭の模範高校となる」ことをめざした。①生活面にわたる指導教官制度、②軍事訓練の導入、③成績の席次廃止、④選手制度や応援団の禁止、などである。さすがに禁酒・禁煙の強制はあまり守られなかったようだが、上からの規制と管理がきびしく、中学校と変らないとの悪口も聞かれた。

ともあれ八高の穏健・中正・堅実といわれる校風は、こうした初期の方針によって形成されたといえよう。しかし時代の波は変化をもたらさずにはすまない。大正中期頃から選手制度や応援団も設けられ、寮のストームの頻度と猛烈さは有名になった。昭和期に入ると左翼運動も盛んだった。

八高は名古屋という関東と関西の中間点に位置し、生徒の出身地も愛知県が五割以上を占めるにもかかわらず、開校から昭和十七年までの進学先を見ると、東大が四〇三四人、京大が一六五六人に対し、地元の名古屋帝大はわずか二六八人で、中央志向がきわだっている。

昭和二十四年、八高は名古屋大学に吸収され、翌年に廃止された。

秦郁彦『旧制高校物語』一二七～一二八ページ（二〇〇三年、文春新書）より

【資料3】旧制第八高等学校42年のあゆみ

1908(M41)年	3月	官(国)立第八高等学校を設置
1908(M41)年	9月	名古屋市東区外堀町の愛知一中の跡地で開校
1909(M42)年	12月	愛知郡呼続町大字瑞穂(1921年名古屋市編入)の新校地に移転
1917(T6)年	2月	寮歌「伊吹嵐(いぶきおろし)」を選定
1920(T9)年	11月	「学寮規約」を大幅に改正増補(学生自治の確立)
1922(T11)年	4月	校友会の選手制度を承認、応援団結成(5月)
1922(T11)年	7月	四高との対抗戦はじまる
1928(S3)年	6月	街頭ストームはじまる
1930(S5)年	2月	学生10名が不穩文書事件で検束、8名が除名・退学となる
1938(S13)年	8月	集团的勤労作業はじまる
1940(S15)年	12月	校友会を改組し、報国団を結成
1942(S17)年度		在学年限を半年短縮(翌年度さらに半年短縮)
1943(S18)年	10月	出陣学徒壮行会を挙行
1945(S20)年	3月	空襲により、校舎のほとんどを消失(4月授業停止)
1945(S20)年	10月	焼け残った校舎および他校の校舎を借用して授業再開
1946(S21)年	9月	知多郡河和町の旧航空基地跡に移転
1947(S22)年	9月	瑞穂の校地に新校舎竣工、復興記念祭を挙行
1949(S24)年	5月	名古屋大学に包括され、名古屋大学第八高等学校となる
1949(S24)年	7月	名古屋大学瑞穂分校(教養部)を設置
1950(S25)年	3月	名古屋大学第八高等学校を廃止

図録『旧制第八高等学校—伊吹おろしの若者たち—』による。

【資料4】第八高等学校 歴代校長一覧

	氏名	在任期間
初代	大島義脩	1908(M41)年6月 ～1918(T7)年9月
第2代	岡野義三郎	1918(T7)年9月 ～1921(T10)年11月
第3代	芝田徹心	1921(T10)年11月 ～1927(S2)年8月
第4代	小松原隆二	1927(S2)年8月 ～1940(S15)年1月
第5代	伊藤仁吉	1940(S15)年1月 ～1945(S20)年11月
第6代	坂井喚三	1945(S20)年11月 ～1946(S21)年5月
第7代	栗田元次	1946(S21)年8月 ～1950(S25)年3月

【資料5】
大島義脩胸像除幕式（一九一九年十二月）挨拶にて

（前略）……本校の創立は此頃流行の学校増設とは全然意味を異にして居たのを忘れてはなりません。この頃は志願者が入り切らないから学校を殖やすのですが、本校の出来た時は既に七つの高等学校がある所ですから、一つ位増したとして収容人員を増す上には殆ど何の役にも立たない訳です。これは他の七つの高等学校が出来てから十年以上になり、段々だられて来たから、新しい高等学校を造つて引締つた所を示し、他の学校を覚醒せしめようといふ目的だったのです。即ちこの頃の学校増設は量の拡張であり、本校の創設は質の向上であつたのです。而して本校はこの重大な責任を立派に果して来たので、このことは先づ文部省が認め、次いで各帝國大学や、高等学校も認めるやうになつて来ました。これまで本校は十年以上の先輩たる七つの高等学校を押し上げて来たのです。これからは十年後の今日新に出来る後輩を引張り上げて行かねばならぬ責任を持つて居るものと私は信じます。……（以下略）

『大島義脩先生伝』九七～九八ページ（一九三九年、大島先生記念会刊）より

NUM 第15回企画展 特別講演

寸描一第八高等学校

大学文書資料室
助教 山口 拓史

【講演のねらい】

第15回企画展の趣旨をより深く理解いただくために、
「伊吹おろしの若者たち」を育んだ旧制第八高等学校のショート・
スケッチとして、草創期八高に焦点をあてる。

1. 旧制高等学校とは

(1) 中学校令[1886(M19)年]

- * 実業教育と高等教育準備教育
- * 尋常中学校と高等中学校(当初7校)

(2) 高等学校令[1894(M27)年]

- * (第一から第五の)高等中学校を高等学校に改称
- * 法令上は専門教育、実態は帝国大学予備教育
- * 1908(M41)年までに8校のナンバースクール

(3) 改正高等学校令[1918(T7)年]

- * 男子高等普通教育
- * 原則は7年制(尋常科4年、高等科3年)で、高等科のみも可能

2

2. 八高創設の経緯①

(1) 創設の背景

- * 1898(M31)年: 約10年ぶりの官立高等学校増設議論
- * 1900(M33)年: 岡山県への六高設置が決定
- * 愛知県への誘致活動は詳細不明

(2) 愛知県による誘致活動①

- * 「1900(M33)年度に七高設置」の情報
- * 1899(M32)年臨時県会: 誘致のための追加予算可決
- * 1901(M34)年通常県会: 誘致のための意見書可決
- * 1901(M34)年: 鹿児島県への七高設置が決定

3

2. 八高創設の経緯②

(3) 愛知県による誘致活動②

- * 1905(M38)年: 官立名古屋高等工業学校の誘致成功
- * 八高誘致活動の再燃(愛知、静岡、長野の各県が誘致)
- * 1907(M40)年通常県会:
建設予定地(第五中学校建設予定地)の提供と
校舎等の建設設備費用の寄付を可決

(4) 第八高等学校の創設

- * 1908(M41)年3月31日:
「文部省直轄諸学校官制中改正」(勅令68号)に
より、翌4月1日に第八高等学校創設

4

3. 初代校長大島の八高運営①

(1) 初代校長大島義脩(おおしま・よしなが)

- * 1871(M4)年丹波国水上郡(現・兵庫県丹波市)生まれ
- * 第三高等中学校、帝国大学文科大学、同大学院を卒業
- * 1894(M27)年:一年志願兵として入営(24歳)
以後、36歳まで陸軍省兵籍を保持
- * 1908(M41)年:八高初代校長に就任(38歳)
- * 10年の在任期間中に八高の基盤づくりに専心

5

3. 初代校長大島の八高運営②

(2) 大島による新機軸

- * 教官訓練:食堂座談、教官室ストーブ会議など実施
「諸君は学者であり、教育家であり、官吏であらねばならぬ」
- * 指導教官制:創設時に導入、のちに他校にも普及
- * 軍事教練と現役将校による検閲:
高等学校での軍事教練は八高が初めて実施
- * 五点飛探点法と成績群団制:
わずかな点数差による品等づけをやめ、大同小異の
成績の生徒でグループをつくる

6

3. 初代校長大島の八高運営③

(2) 大島による新機軸(つづき)

- * 課長制度: 事務迅速化のため生徒・教務・庶務・図書
の4課に課長を配置、後に多くの直轄学校が採用
- * 八高同窓会: 1911(M44)年7月に、高等学校では初め
ての同窓会を設立
- * 運動奨励: 選手制度否定により各種運動を均しく奨励
- * その他:
特待生制度による学業奨励、公認下宿(第2学年以
上が対象)、知多海岸野間での夏期水泳場の創始など

7

4. 八高の校風

(1) 「勤勉八高」(ブックレットp.20)

- * 高い出席率: 創設当初が平均95%、大正期以降も平均
94%程度の出席率

(2) 「教練八高」(ブックレットpp.21-22)

- * 大島校長の創意による軍事教練
- * 「校長は…学問尊重と並行して教練には頗る熱心であった。」

(3) 「スポーツ八高」(ブックレットpp.22-24)

- * 「運動奨励二関スル方針」の制定: 「選手ヲ養成セス」
- * 1922(T11)年の選手制度導入:
野球部、陸上競技部、水泳部、漕艇部、柔道部、排球部、蹴球部、
弓道部、剣道部、相撲部など多くの運動部がつくられて活躍

8

5. 生活拠点としての学寮①

(1) 代用学寮(1908(M41)年)

* 7つの寺院と公認下宿1軒:

妙本寺(本部)、本住寺、本要寺、大法寺、蓮勝寺、蓮華寺、本立寺

* 寮紀の制定(ブックレットpp.24-25)

(2) 新学寮(1909(M42)年~)

* 学則(第52条)に基づく全寮制:

「新ニ入学シタル生徒ハ特別ノ事情ニ依リ通学ノ許可ヲ
受ケタルモノ外總テ学寮ニ入ルヘキモノトス」

* 新学寮規約(1920(T9)年):

「吾人寮生ハ寮紀寮則ヲ守リ、自治ノ精神ニ基キテ善美
ナル校風ヲ発揚センコトヲ期ス」

9

5. 生活拠点としての学寮②

(3) 学寮生活の「アクセント」

* コンパや寮会: 代用学寮時代の茶話会が起源とされ、
寮会は通常年3回の開催された。

* ストーム: 代用学寮時代から小規模なものが行われたが、
時代とともに行動が大規模化・過激化した。

* 寮歌合唱: 1912(T1)年に最初の寮歌「殺伐の風」選定。
「伊吹おろし」は1917(T6)年選定歌のひとつ。

10

まとめにかえて

今なお強烈な存在感をみせる旧制高等学校

エリート養成機関ゆえの・・・

- * すぐれた教師陣による少人数教育
- * ゆとりある一般教養カリキュラム
- * 学寮生活を通じての強い絆形成

11

NUM 第15回企画展 特別講演

寸描一第八高等学校

大学文書資料室
助教 山口 拓史

ご清聴ありがとうございました

【付録】

本稿の冒頭で述べたように、講演会当日には八高会の方々にもご来場いただいたので、質疑の時間を利用して八高OBの方々から当時のことを直接伺うことができた。以下に、ご発言内容を紹介しておきたい。

(OB1) 実は私、八高の生き残りの一人です。その生き残りの一人として、今のお話聞かせていただきまして、非常によく勉強されていますし、非常によく調べていらつしやるので感心いたしました。ただ、残念ながら、学生サイドに立った考え方で、まだそこまで難しく突っ込んでいらつしやらなかったかと。

といいますのは、私たち学生は、八高におりまして何を学んだかといえますと、ただ一言「考えよ」ということだけなのです。それを實際学んでまいりました。一つは、まず初めに八高の採る人数、八高の学生の人数より、大学の人数の方が多いので、高等学校に入れば、必然的にどこの大学でも入れるわけです。そうしますと、目の前の勉強は特にしなくてもいい。例えば今、高等学校になりますと、大学へ行かなければならない。しよつちゅう勉強にさいなまれる。それから、さらに大学へ行きますと、今度は就職にさいなまれる。もうのんびりとして考える余裕は全くない生活だと思えます。その点、私たちがありがたかったのは、その三年間、全くそういうことを考えず、「考えよ」ということだけを一点に教えられてきたと私は思います。

そのために、寮生活は何だというと、寮の中にあるのは、すべて若い人間を集めて、それで、ものを考えよ。そのためにも人生なり、人間の生き方なりをとことん議論するわけです。例えば昼からやり出して、明日の朝まで議論

するなどということは何回もありました。そのようにして、人間に考えさせることを覚えさせた。これが一つには寮生活です。さらに学校の生活もそれに準じました。

それから寮歌というのは、内容を見てみますと、私は、実は八高の校歌を知らないのです。そのぐらい、校歌より、寮歌の方が盛んでした。なぜかというところ、寮歌はもう全部、人生を考えるというところで成り立っていた歌です。そのために、こんなふうな人生を考えよとか、人間を考えよとか、これがいわゆる明治時代に、学校を、この八高を、高等学校を作った大きな方向です。いわゆるエリート社会を作ろうと、そのために高等学校八つを作って、次の世代をこれにお願いしよう。

確かにそのとおりで、実は八高も作られた当初、明治天皇が行幸されました。昔、明治天皇が行幸されるなんて、えらいことだったのです。それから大正天皇までも、まだ皇太子殿下のときに行啓されました。毎年、必ず文部省から文部大臣が視察に来ているのです。そのぐらい、次の世代を担わせるために、そういうことを一生懸命、国家の肝いりで作ってきた学校で、非常に私たちはいい生活をさせていただけだいたわけです。

その中で出てきたのが、「考えよ」という一言だろうと思います。その結果は、「恥を知れ」と。考えてむちゃむちゃなことをやるなら、「恥を知れ」。こういう人間がもつと今の世代にいれば、こんなむちゃむちゃなこととはやらないだろう。必ず考えてから物を行動すると教えられてきたのが、私たち八高の学生生活だったように考えております。それから今のストームで、むちゃくちゃなことをやるというのですが、あれは若い人間を集めてくれば、どこかで息抜きしなければならぬ。例えばちよつとご飯がまずいと「賄い征伐」に行つて、もう明日の朝のご飯を全部食べてしまった。そんなことをやって、若さの象徴だろうと思えます。寮歌のあと、デカンショをもう裸になつて踊りまくる。これも若さの象徴で、どこかの息抜きを作つてきた方法というだけだだろうと思えます。要は学

生生活を通して勉学にいそしみながら、勉学でも普通の単なる点取りの勉学ではなしに、人生を考えてくれた。これが三年間、私たち八高で教えられてきたことだろうと思います。

今、皆さん、八高の卒業生は、後期高齢者ですから、もう何にもやることできないので、一時、戦後はそういうまた高等学校のサイドを作ろうという運動が非常に起こりましたのですが、残念ながらそういう人たちも皆亡くなりました。今はもう、どちらかというと、そんなことをやっても、全く分からない人たちばかりです。高等学校のことを、今日、お話ししていただきまして、私たち非常にありがたくて、こういう学校が名古屋にあったのだというだけで、皆さんに覚えていていただければと。僕は、もしまたこういう学校ができれば、こんないいことはないのではないかと思っております。以上でございます（拍手）。

(OB2) 実は私、最終入学者でした。昭和二三年に入りまして、八高一年で新制大学に変わったという、終戦直後の学制改革を受けた人間です。したがって、もうそのときは、学校は、寮は焼けておりまして、ほんの一部の人しか入れない。今ございましたように、新たに入った一年は全寮ということは、食糧事情もそうでしたし、とても考えられない。例えば岐阜の奥からいらしたとか、そういうやむを得ない方だけが入寮しておられました。大体、七〇〇八〇人ぐらいの人が入っていただろうと思います。

禁酒・禁煙ということがありましたが、さすがに中学五年を過ぎると、世の中も親たちもそうでしたが、たばこなどは解禁になります。ですから、皆、大つぴらにやりましたし、私どもも、八高へ入りました一年のときには、入ってしばらくしてから、学校内でコンパをやるうということ、高辻付近へどぶろくを買に行きました。そういうことで、やりました。

それから、議論については、寮生は確かにやったかもしれませんが、私どもはそういうことはやりませんでした。いろいろな議論はしましたが、個人のうちへ行ってやるということで、寮でうんぬんということはありませんでした。

(OB3) 私も同級生で、八高には一年間だけお世話になって、新制に切り替わった者で、文科と理科ですので、若干の差はありかと思えます。今、ご質問になられました、文科と理科で議論の内容が違うかどうかということですが、これはほとんど差はなかったと思います。もう渾然一体で、理科の人も文科へ行って、文科の人も理科へ混ざって、そこで文科・理科の分け隔てなく議論したと思います。ですから、同じ専攻、理科の中でも、文科系に進んだ方も結構おられますし、それから文科の中から理系が変わってこられて、大学は理科へ入られた方もたくさんおられます。文科と理科というセグリゲーションみたいなものは、全然なかったといつていいと思います。

(OB1) 女性との問題は、戦前は私たち、男女七歳にして同席せずというような問題もあったように、そういうふうには教えられてきたものですから、もちろん、戦前のときにはそうだったのです。戦後になって急にオープンになったのですが、やはり八高の中では、そのようなすぐ手をつないで歩くなどということは、全く誰もやられませんでした。戦前のままで。

それから、その一つとして、ただし、女性に対するあこがれは確かにありました。何だといいますと、実は名古屋から河和の地へ学校を移しました。というのは、名古屋の学校が戦争で燃えてしましまして、勉強するところがないというところで、河和の航空隊の跡を使わせていただいて、そこへ移りましてやったのです。そこでまた火を

出して、ちょっと燃やした。それは名古屋へ来る大きな意味合いではなしに、きっかけになっただけで、若い人間を河和の山の中に置いてきまして、放っておけばろくなことがないという学校サイドの問題より、むしろ、ほとんど学生サイドでそういうことを決めて出た。総務というものを作りまして、どっちがいいかというところで、いろいろ学生全体で議論して検討した。その大きな要因は、やはり女性が周囲にいてくれた方がいいという意味合いで、名古屋の方へ移った要因が大多数だったと思います。

そのぐらい、離れてはいるのですが、心の中ではあこがれを持っていたことは事実です。そばに一緒にはおりません。これはやはり周囲の状況、何しろ戦前、そういうふうに着てきた私たちですから、そんな、手を触るなどというのはもつてのほかです。そのたびに遠くから見ても美しいなというあこがれで、だから名古屋まで、学校を無理に持つてきたと。その大きな要因は、火災ではなしに、その問題、男女の問題の方があつたのではないかと私は考えております。

ついでなので、面白い先生について、こんなふうに勉強したんだぞということを一言だけ申し上げます。例えば、「マッコウ」（近藤鉦太郎）という数学の先生がみえたのです。その先生の問題は皆、英語で出るのです。英語の単語が分からなければゼロです。一学年のときに、全部で一回四問題出て、それで前期・後期と四回あるのです。四×四＝一六問題。そのうち一問題さえ解ければ、まず進級、合格です。そのぐらいの難しきの問題を出されるもので、先生があとから解答をやるのですが、先生も途中で間違えて、「これは問題解答なしが正解だな」とそんなふうで。本当に難しく、単なる考えるという物事の人生論ではなしに、普通の勉強もことんやらされました。それが八高の現状だったと思います。

(OB2) それから、女性問題につきましては、今、先輩が言ったあとですが、学校の方としては、学制改革によりまして、初めて女子学生が二人、われわれの年度に入つてまいりました。二人とも理科の方に進学したわけです。やはり、あとからいろいろ機関誌に投稿してくれましたが、本当に八高の程度の高さというものにはびっくりしたと。それで、野崎勝太郎という有名な英語の先生がいたのですが、その学生たちは、個人指導を受けにいったと書いていました。そのような状況でした。

(OB4) 八高の出身でございませう。展示会を拝見して、ありがとうございました。いろいろと知らない資料をたくさん見まして、なるほどと感じ入つた次第です。ただ、表現の中に、八高はエリートを育てる学校であつたと書いてあり、卒業生がどういう生き方をしたかについては、文化勲章、文化功労者の方々のお名前は出ていますが、大部分の方は全く出ていなかったわけです。

八高には、その折々に同窓会名簿が出ておまして、その中を、各々の同窓会名簿を繰つてみますと、アメリカ、イギリスなどの「Who's Who」に載せても決して恥ずかしくないような方が、きら星のようにいらつしやるわけです。それで、先生にお願いしたいことは、卒業生がその後どういふふうに生きたか、どういう場で活躍したかということ、ぜひ公にさせていただきたいと思うわけです。よろしくお願いいたします。

(OB5) 私、八高会の会長をやっています。今日、八高のOBの方がたくさんおられますが、たぶん私が戦前の八高を出た生き残りだと思ひます。私が入つたのは、ちょうど先の大東亜戦争が始まつた昭和一七年です。その前年に、三年の修業年限が短縮されましたので、二年半、昭和一九年の九月に卒業したわけです。先ほど申されま

したように、戦後の復興とか、そういう苦勞をしたOBとは私たちは違いました、やはり昭和一八年になるとちよつと戦況が怪しくなったのですが、一七年は非常にわれわれは自由奔放でした。

当時の一番、高等学校へ入るといふのは、中学校を出るわけですから、大体平均でいくと一七歳。四修で入れば一六歳。早生まれで四修で入れば一五歳で入るのです。それで、昔は高等学校でも専門学校でも、そこへ入れば、もう社会が大人として取り扱ってくれました。やはり、それに応ずるだけの、皆さんがそういう見識があつたのです。ですから、私らと一緒に入つたのも、一五歳がいたのです。一五歳でも、もう八高入れば、大人として認められますから、お酒も飲む、たばこもやるという形でした。

先ほど山口先生がおっしゃいましたように、高等学校は基本的には全寮制です。けれども、昭和の中期ごろから、あまり収容人員、学生の数が増えまして、一年生でも入れない。特に私は名古屋市の出身なので、名古屋市内の者は入れない。もう入る学生の数が非常に限られていました。それが私には唯一の残念なことでした。

寮の生活は、寮生、同級生もたくさんいましたが、一つの部屋に八高の場合は六人。そのうち一名が二年生で、室長といひます。あと五人が、大体文科と理科と混ぜこぜにしまして、やつたのです。私たちはそれが非常にうらやましかつたので、それにあやかるといふわけではありませんが、私は陸上競技部に、運動部におりましたが、何のかんのと言つて合宿ばかりやつていたのです。

例えば、八高の場合は、金沢の四高とライバル校で、対抗戦をやる。対抗戦の前に、どこの何のかんのと言つて、多いときには、私は四月に入つたのですが、四月の中ごろから、運動部の合宿だといつて、みんな寮にいない者はここへ入つて、二年も三年も来て、一種の寮生活を楽しんでいました。先ほど申し上げましたが、特に戦争前に「男女七歳にして席同じうせず」と、そんな女性とつきあう人はいない。ただ、あこがれの目で見ている程度だと思ひ

ます。

それで、一つ皆さんにご紹介したいのは、松本市に、先ほど申されました、一〇年あとに地名校、学校ができました。松本、新潟、それから松山にそういうのができましたが、松本が一番、それ以前から高等学校の誘致に非常に熱心で、町を挙げて松本の高等学校の生徒を非常に大切にしました。今、松本の旧制の高等学校の敷地が残りまして、そこに旧制高等学校記念館ができています。これは各地の高等学校が結局、いずれは同窓会として維持できないことになりますので、そこへいろいろな資料を寄贈しております、そこへ行けば、一高からすべての日本の高等学校の資料がそろっているわけです。

そこに先ほど申されました、各学校の非常に頭角を現した方々などの偉績も残っております。例えば、有名な「どくとるマンボウ」です。彼はやはり昆虫採集が好きで、山が好きだったので、東京から松本へ行つて、寮にいて、そのときのいろいろなことを落書きした。そういうものも残っておりますから、皆さん、もし松本へお出かけになる機会がありましたら、これは一見する価値があると思います。それぞれやはり各高等学校の特色が出ておりますので。陸上自衛隊に侵入して亡くなった三島由紀夫の、学習院の学生ときの集合写真なども残っております。非常に貴重な資料がありますから、ぜひお出かけになったらいいと思います。

〔この付録部分は、講演会当日の録音内容をテキスト化し、山口の判断において一部修正を行ったものである。〕

(やまぐち・たくじ 大学文書資料室)